

映画はカメラ ボーダレス

ファッション界の革命児から 目も心も刺激を

中野 理恵

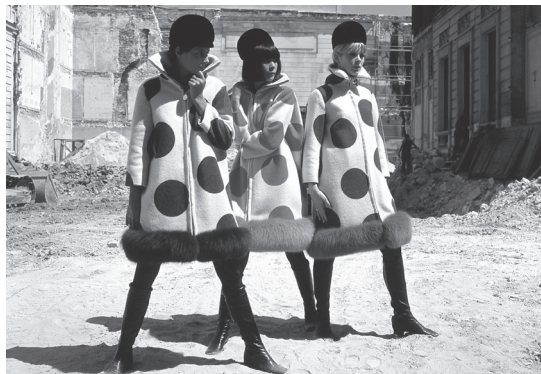
ピエール・カルダンは1922年生まれなので、今年の7月で98歳になった。今でも現役だとは想像だにできなかったのだが、スクリーンに現れたのは、背筋を伸ばして動き、歯切れよく語るカルダンその人だった。驚いた。

70年代だったのだろうか、オートクチュール(高級婦人服)に代わる大衆ファッションとして、プレタポルテ(既製服)が大々的に宣伝されていたが、「大衆の意味を取り違えたのだろうか」と首を傾げるほど、OLの身には手の届かない額だったことを覚えている。当時の日本は高度成長期。月刊女性誌が何冊も発行されていた。オカッパ頭の松本弘子がカルダンを見事に着こなし、腰を手で掴むような仕草で誌面に大きく写っていた。以後、カルダンの名前は、雑誌やデパートで日常的に目にしていたものである。

本作は、ピエール・カルダンの人生を丹念に辿り、彼の現在を追ったドキュメンタリーである。

てっぺんが真ん丸になった円柱形の帽子を被り、○(円)や大胆な幾何学模様が描かれ、白やオレンジなど色を斬新に使った鮮やかなコントラストのドレスを着て、背筋を伸ばしたモデルが颯爽と歩く。数十年前、ファッション誌を飾った衣装がスクリーンに映し出される。

カルダンはイタリアのヴェニスに生まれ、ファシズムの台頭を避けて、2歳の時に一家でフランスに移住。1939年にフランス中部の街、ナチスの傀儡政権が置かれたことで知られるヴィシーの仕立屋で、ファッションへの道をスタートさせ、1945年、『美女と野獣』(ジャン・コクトー監督)で衣装や仮面の製作を担当。その後、クリスチャン・ディオールのもとで修業を重ね、1950年に独立した。1953年、プレタポルテへと舵をとり、男性服も手



©House of Cardin - The Ebersole Hughes Company

掛けるようになり、同時に、日本や冷戦時代の中国、ソ連にまで進出。飛行機からタオルまでをデザインし、60年代には、大女優ジャンヌ・モローとの恋愛も。森英恵や桂由美、高田賢三等、日本に与えた影響も大きい。そしてデザインを使い捨てにせず、ライセンス制を導入した。

デザインに留まらず、演劇やライブのために〈エスパス・ピエール・カルダン〉を創設して新人アーティストや伝統芸術支援にも取り組み、ユネスコ名誉大使やフランス学士院芸術アカデミー会員に選出など、目が眩みそうな経歴である。

〈中国に進出〉では、あの万里の長城で大々的なファッションショーをしていたとは！石の敷き詰められた城壁を、華やかな衣装をまとったモデルが颯爽と歩く。無彩色の人民服で暮らしていた中国の人々はどんなに驚いたことだろう。いや、労働に明け暮れていた人民が、そのファッションショーを見る機会はなかったのではないかな。

カルダンの発想は大胆であり、前代未聞としか表現しようがない。これほどの人とは知らなかった。まさに刺激と元気をもらえる映画そのものである！

《Cinema Information》

『ライフ・イズ・カラフル！未来をデザインする男 ピエール・カルダン』

アメリカ・フランス映画(101分)／監督:P.デビッド・エバソール&トッド・ヒューズ／10月2日(金)よりBunkamuraル・シネマほか全国順次公開

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。